

この編は驚怪説の錯怪に辨じて重複讀文内附櫻井久次氏より

飯台曲亭翁著演

初編五冊

# 昔語質屋庫

文金堂梓

春亭勝川主人畫



文辞根柢どあるをども本居ありて根本房が説得て海寧布く所以爲

雕寫

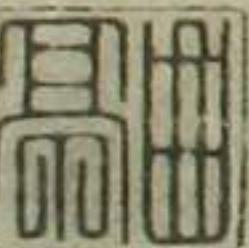
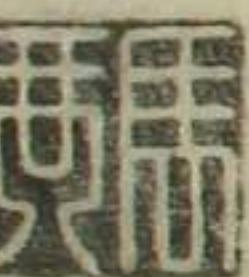
白痴

上  
志

湯  
走

ホウノ威の冊子を纏ひて、狂歌をね乃  
まくらへとも、身で勤業をきらひて、写しやる  
事は少く、の異因を海にさす。狂歌を推進を  
意とせず。むらかみをすのり、名をあらわす。  
ヒヨコのよまとおもて、おほほよ開発し。そ  
りの後は、種々とくわづかず、あるまい。  
大、豪、富、年、よ、て、く、の、よ、く、比、富、

とて詮體をゆう。因毛したれ書のある  
所へより頗る福壽亭は齊東野鷺也。鄭  
侯侯あつ楚辭は荆人の方言を取る  
事も又詩の序をもる。後漢を  
も用ひまつてのこりをわざや。先  
秦詩要、被後漢を傳へ。其言が或も  
とんふく苟も後漢をもせまどあらむ。於  
かを隨て廢を拂ひて。是が右山房  
義小説の本とて後漢をあらわす事  
は後漢は必新古じしもとく後漢。一も  
あらわす事も。うれしく思ふ。之を  
筆す。かくもよも。考究味を廢つたれ。  
筆揮はいや。筆すよ始つてよこせばう  
そくもとじよくみゆきのあらわのうちも。議つ  
文化七年庚午林衡菴笠隱居  
於其心室中



歌  
支

李も車

ま年

野山

録支考

静山

賀屋庵

卷一



ゆのとよか  
もすみ之  
をすまえ  
つう帰る  
ひむれ時也  
来ぬまし



賀屋庵

卷一

義仲の  
息父隆  
故郷をりんれ

拘と

秦と  
典物の譬  
燕太子丹



昔語質屋庫初編總目錄

發端室咲の質草

第八眉間尺觸體盃

第一讀書先生歌案

第九橋逸勢薄今一行物

第二友切丸

第十紀名虎錦繡梳鼻禪

第三齋戒十郎衛小紋衣袖

第十一蓑裳脚前苦節社

第四諸葛孔明陣大鼓

第十二九尾狐裘

第五俵藤太龍宮入の弓袋

第十三崇德院天狗瓶取剪

第六石堂丸高野請脚絆

第十四鎌倉時代の上下

第七平將門袞龍製東下

第十五米糀上人の乞食袋

通計一十六條完

前語質屋庫卷之一

東都

曲亭馬琴演



發端室咲の質草

行相值莖く相望枝く相準葉く相向華く相順實く相當此無量壽經又所言天宮の宝樹下そ塵世みゆ所不あざぞ。ど法容齋が隨筆とひや霞も雲井又木人南部の皇居イ遠からぬ六田の御の質屋と。ア理み和訓の典物と頃々世渡く。野五器堅い河上善つ。好事屋宝樹とのふりのあつけ。後醍醐帝の延元より。後龜山院の天授す。南帝三世。俺ハ二代。好喜小枕辻。通興貿易て活業と。さぬづ小足。足。世掌ハ夏冬の入番。のこす。ア。毫毛取。質草の小禁うち。枝を。毛を。要か。小南朝

賀屋庫卷一

五

元末難歲の時の要あへ鼻と割。談又漏びて大臣納言。辨參議。福  
門の公族也。先祖傳來の什物と好ま屋が庫住ひて八月限の太  
樹波将又流もとそらうたよ利足の碇よ堅き。齒とば。夏の虫乾い入ひ小  
任し。冬の大災も苦ふ。身の私どり。ぶ物かくこそが物も。金が缺の世を  
さす。アソン世紙徇せ十文字。縲魂の中あうとりども。その罪よふしこと  
りて。その子よりつて。借茂と譲る質札恨しと。アソス凡夫の愛惜心かの  
質庫よ尋ねうるべし。けふ。も兩夜長月の簷の玉木青寂で遠々寄すとの  
壇枕よかゝへど。店ハ真闇高射。主管が齧歯ハ浴室の須の栓挽よて。  
おのづから聞くかどく。丁稚が寐語ハ燈市。怠敷囉小曰ゆ。又炊妻  
が寐がづく。采儀と投るがエ。女ユケ外そ枕ハ輶する綿桶ふゆ仰う  
ベ。凡サ社の寐而不寤所以。血丸盛ふ。肌肉滑ひ。乳道通ず。宮衛の  
れぬ。本來の老人質先とり入ながら。りつて。病ひの不寐病人も  
たのまぬ。金の術と。うらうと睡と。寝つくす。うの門の狗。一馬場  
責す天井の扇よ枕歎て。しづか。宿る。う密と起やうと引挂る鐵網の手燭を  
袖りて。うち掩ひ。網戸客房。庖厨まで三遍廻。バ怪のう。質庫のかくよ處で  
の。声こして。うめき。うの盜賊。つと胸うち。説き。卧する主管小野おと  
の。声こして。うめき。うの盜賊。つと胸うち。説き。卧する主管小野おと  
為体を見定めんと。流石ハ若功矢と。繕めて。怪をみだら。説き。足を。翻  
息と。籠庫の戸口へ立つて。網戸の目。うそ。覗け。二階うち。洩る燭臺の。

經解元  
精精敵  
不倦也  
又云。濫  
謂不利  
真也。

賀屋庵 卷一

臘烛早にて向昏のどく人夥圍坐してうち相譚る物のいひよ。盜賊やへ組ぞうり。宝樹へはしづとうらゆて亦つゝとやへす。南朝第一の博士みづら北島准石親房卿の宣ひてこそあれ。白毫と昏ぬ丘陵の間うゑてその出へをもふと入もふ中の必金ありと白澤圖ふ記し。又黃金の亮へ赤し。夜へ火光あり。又白氣ある。と本草みもこむこと。これら金とあると車類財物載そる。豈金浅のみならん。韓幹が畫馬也。鬼を衆せそく走り。金國が画う馬へ夜萩戸の芳宣と食え。伊勢國の古廟の繪るへ疫鬼と乗てま。吉山嘉禾門檻の石刻孩兒ハ夜坐く人を刲。コが相模路ある石地蔵へ化て旅客小砍り見て。それば大刀衣裳古畫の額年と積とけとば。その精鬱にて崇あらわらざれば鬼の焉。

以奪ひ去らきと郎瑛ハ怖うとて過去ヒ引き未来ヒ怪。宣ひたるト傳へ受けべ。至一正。貨物の妖怪かくやあくんびとん。とくづくやど毛骨ぞら。怖とも怖し。見上きのこゑ。腰うる縫。で絞出で。綱戸の扇と密と開く。塵埃落の萬子よ。彼首是首と瞻仰バ。五十日掛の臘燭と大燭臺四五本へさげもろく寫つ。光るあら弱れ。あり。和風俗漢様や。或ひ武者態のりめげ。或も美婦人の自うる。商旅の義衣被るハ秦よ入とんとする。呂不韋うとすと文屋唐秀が歌謡よ仰す。薪負る山人の光の蔭よ休める。大津黒玉。身と源ぞらみぞ。どうくよま。朱買臣が繞書ふ仰す。古往今來もく。この年木の庫よ籠。諸方の道具質か。假よ形狀と蹟。と。ありゆく。

世を墓なり。憂鬱と語り慰めあり。現物の執事へ有情小生（おうじやう）を心  
小入。古き女の小袖を買って。その袖口より細する。又とテ出でら  
招く。眼前そトといふ世の怪珍も詭かず。つづると語ふせべ。  
安丸と瑞かる大和桧木の台階子。隣るを彼外へあすれど。一眼眞  
てへ吻吐息。二段眞てへ又疊疊。三段四段とすすむ。欄干の舊より  
頭と擡て。まんき上座。小一箇の老翁。鶴衣（つるい）とぬ襷（ぬせん）にて。読書先生  
と稱する。云々何物ぞ。孰視せば。和細工の唐木造り。舊の主こそ  
定うる。裏ふ延喜の年号記せし。その容異形の歌葉（うたは）の如也  
隨よ黒く手觸見。哉許の書を疏けん。とその時代えりひせり。  
この席上より第一番の博士と云ゆ。物體あり。

## 第一

## 讀書先生の教案

その之れ流書見臺先生席と佑と云ひて乾びゆ。嗟。往古学校  
の盛りせふ。大學博士あり。音博士あり。その後人文章。明治陰陽。雷  
算。周易。漏刻木の諸博士と云ふ。その道と傳ぐ。その業を受へ。俊  
傑の学士ひと云ふ。その比ハ某。菅江の名家と謄（ひが）て。小林生小  
字。散せられ。學す校廢。且て後へ且く才納言入道信西の家小あり。がて保え  
の擾乱。よ人の云猛。三禍既に亂きて。相語へべき友も。村儒（むらじゆ）  
寄宿して。多くの年月を過せ。ふいぬる。延元の末。南朝の博士。讀書翁  
小伴。吉野の皇居近く。それば殊更よ鍾愛せられて。月よ六本の講  
席と缺ど。その家三世の重宝。うちよ當主へ甚しけ。隨弱りのよう。半習堂  
向ふ嫌ひ。家公ハ世話を死。死とて一年うちよ。主ぬよ。大酒と飲せ。す  
類をりて。聚りて。友。うちよ。うちよ。遊女の昌定。と飲と買と小遣し。是がば。

賀庫庫 卷一

家傳の書畫を一部售て。三万金。あり。舊居を出。終藉史傳。  
歌書雜書。和漢の珍書。いづれ。紙魚の肚を肥もの。折り被てさ  
さこうが。何のよりとも譯うねば。唐宋名家の法帖。芝居の番附  
と。四人。延喜天福の詠草。ハ熟妓の豐簡。など。娛からむ。よく。残賓同報  
小賣もの。損買りの。得缺。本の。仏書。消壺の蓋を張るまへ。宅を  
腕を。古板の方書。炮爐。ふくられ。炙て。黃。志。下至。蠶。する。  
孟子。誠め。を。み。戸の節孔。と。塞ぐ。よ。経りて。瀕。闕際の一匁。と。遺  
彼書を。燒き。儒。と。坑。み。と。寔。テ。秦の始皇の。恩政。そ。易經。晉書  
残。ち。小。驕奢。を。省。き。衣食。と。薄。し。年。と。共。よ。積。貯。し。又。祖の。義。書  
淫酒の。為。小。一部。も。遺。え。沽却。も。残。え。ころ。ど。ひ。と。づ。いくた。ひ。う  
道具屋の。ひ。ふ。遙。う。と。と。り。しが。こ。重。の。正。く。家。の。像。見。と。負。効。力。括  
済。と。こ。も。小。辛。じ。て。か。引。腰。卷。も。と。壘。崩。き。か。け。し。土。糞。の。棚。へ。あ。げ  
ら。且。ト。よ。日。待。の。茶。番。年。忘。き。の。素。人。淨。福。理。の。見。臺。ふ。調。室。から  
そ。朽。き。く。宋。人。の。韋。甫。と。り。く。楚。人。の。冠。よ。ど。ふ。も。芳。る。果。へ。質。屋  
の。庫。住。ひ。罪。々。て。縲。絏。の。恥。も。暗。主。よ。住。身。の。不。覺。各。住。の。幻。の。中。ま。  
推。量。ら。且。と。痛。と。苦。う。ま。う。く。り。ひ。け。と。ば。衆。皆。頻。よ。嘆。息。く。現。イ  
先生の。寛。へ。じ。く。宝。へ。と。ぞ。身。の。す。て。が。え。と。り。く。ハ。凡。夫。の。手。前。傍。す。先。祖。の  
千。幸。万。苦。じ。て。組。立。ト。退。家。庫。所。領。を。懷。して。取。る。子。孫。へ。徳。も。と。一  
ゆ。り。け。ま。と。不。自。由。あ。く。ぬ。洪。福。と。洪。福。と。へ。ぢ。ひ。も。う。け。じ。淫。酒。の。鳥。小  
浴。が。紀。宝。と。忽。地。失。ハ。大。慾。ハ。所。謂。テ。慾。よ。ち。う。紀。も。毫。小。人。の。二。種。む。う。  
お。を。拂。う。れ。り。の。ハ。あ。じ。唐。山。ハ。戰。國。の。じ。れ。う。と。ご。く。そ。の。子。と。實。と。て。款。へ  
遍。せ。う。の。そ。う。大。日。本。の。上。古。へ。人。の。こ。う。淳。朴。あ。く。人。質。あ。く。の。う。に

曾我五郎



大殘ノ虎

讀書先生

日紀ノ虎

諸葛孔明



稿やうう文兒

好  
事  
屋  
宝  
樹  
ヶ  
賃  
車  
の  
二  
階  
小  
ち  
ひ  
て  
勸  
學  
の  
丸

平  
ノ  
將  
門

小保九平治の播磨より。親子の間でも兄弟でも。ひそかにりりて由利  
せんと。壽永のちづれ木曾殿へその子志水冠者を柱ぐ。兼金を貰ひ。  
又え弘の三年め。足利とひへその三男。千寿王と質じて。相模入道へ遍与  
せり。以来。些旗色がほろくろると人質もしく遣縁せぬ。大將の稀有也。  
とひの榮枯得失へ人間の常なる。小質屋とひのせふるいへ金錢の融  
通経て。貧乏からこそもあらむ。人質と道具質へ呂糸をかうれ俺們  
の主の先途よとづる忠臣。せきの史籍より載らきて。芳りた名と留ひ。ま  
か可憐にて。でも質ふあれば。衣類雜器ハ何ともせん。而も餘計の借入  
とく。功者小主管と口説の。受戻。その遠慮をぞ。萬事へ兩損と。  
そしめへら瑕物。端よりごくで推曲うき。厄限果てせよ。生の質の流  
と賤めらる。過世つるる。惡報をや。鳥の頭を角くす。馬の額へ角く  
生ても。かくやで利足が度でん。舊と返る日へあはせ。嗟夫朽ちや。とまゐ  
り。とも小声かう立て。發憤とへ。続書先生も涙くらうと。その述懐へ  
理する。各位の眞ひどく。宝ハ身のまゝ質。とりふる善惡。あん。清貧ふ  
ちく。世よ零落生。親の爲主の方よ。食と。の。稼がみぬにて。賣べき  
物を沽却。ひだりぬき。死什物へ。且く質入さる。恨むざきをよあらば。  
淫酒の爲。手の皮剥。自徒よ品あら。かる忠孝信義の人へ。年中質  
屋へ奉ふ。ても。文人へ方策と售ら。武士へ腰刀と質ふ。置ぜられ。その  
本と。もと一がり。そ方本乱。と。末。ちこまく。和漢の宝。つま。あれど。  
仏法僧の三宝。あも。かうする書藉の。そなれ。つも。の。跡。大約盜賊の  
目かうりの。第一。金残。第二。衣裳。第三。大刀。第四。銅藏。第五。大  
雜具。ろび。召募の由断を。ふと。とて。乾く。洗濯繩伴を。も。水入口

の用一紙入と。動それば茶釜と外し。茶灌とこれら。呑薦へあまよ。  
一帙五圓金の唐本が鼻の先へ投してめつても方策のを捉て走る盜賊へ  
いと稀なり。トトやう。價とおうて盗むこと。珍書へ珍書の印あれば。  
直をちくふ便あり。信の道に入りのをあらむ。倍へきよ。賊でもやく敵人の  
宝とぞ。このへ経藉史書よりあつる小かる宝と宝とせざるへ宝と知れ  
迷ひて將武夫の宝とぞりの。弓馬六奥の武器よほぞ。あうれゆ文う  
晴けと。眞の弓馬とへいへど。商賈の宝とぞりの。四方雲顧乃  
君子なり。あれども算筆小疎けど。一日中世へこらむと。武士へ武士の  
学問あり。商賈へ商賈の學問あり。士農工商ものぞく。家業よろくて  
よく身と脩め。行ひと。なむりのへ聖人の徒といふべ。故りみこられ。武夫  
の弓馬劍法。農夫の時を。すゞとして。よく耕一耘る。山妻の蚕糸と。  
績き織織るも。番匠の観船準繩りと。よく柱とぞとす。商賈乃  
算盤取て。の本残を減す。もみを。不聖人の教めへとく。かれ  
人間日用の所他と。悉く儒の教づれ。ハサヒと戸ふよと。さるへる。入ると  
ちく道よらざるへ。家来へ主を教ひ。子へ親と嚴び。妻へ夫よ冊と。明  
友よへ信とぞ。長者ふへ坐と。ゆづ。ゆきのと。ば憐えりづけ。嫁ぞ  
婚への式三獻年賀追善り。ばよう。飯碗へ左よ奉。筋と右よ操。て延  
ミナ聖人の教ふよ。礼節の端くじをちうる。夷くへ聖人の遺徳  
と思ふ。亦是天地へ萬物を化育されども。萬物へ天地の徳とちく。親へ  
子を養育されども。その子へ却又母の恩徳と。ゆづ。かねく。善く。徳と。布  
る。がう。その徳と。徳と。せと。と。と名つけて仁とり。もする。ふ人も。これも。井の  
底の蛙ふひ。大。大海の。涸きと。あく。三尺四方の井戸側。又推當て大海

第二章  
友  
切  
丸

衆皆驚きそれとぞ見だ。古今闇の袋小袖下、金覆輪の袴と穿。洞金造  
りめ。赤洞駒子より丸鞞の帶と締。重汚の腹巻小、南蛮鎌襷の刀締  
と懸て。金無垢の拂え。おほきの袖と意氣揚々する形勢に向ひねど  
名とある勇士の骨相。且と翁並の友切丸五幕僉役の名他と威せぬ  
りのひきへけり。彼壯仗へあうと貯で瞪見る因貫は辭をそだ。よもぎ  
燒又と切りて匂ひの下に息と吻をせよ朽を死正もあらうね。これハ往昔建  
久四年時も五月の兩夜の待合曾我五郎ふ伴と。ユ兼祐満と寝と  
る。時宗祇の子宿の大刀こもるぶりの経よろ。源氏の重宝薄縫と  
ゆえ。又友切丸の名と肩せどる。故に一旦紛失して鬼王ホヌ苦と被ふと  
いども。彼ホヌ悔て友切丸とく索しやゑふ。名の諸怪うち急かせど  
今小至てん。薄縫とゆべりのこそみけも、ちももももねゆもあぐて。友切  
丸と稱す。送恨の至す。言語同断。このエカラと説あつて。ハいふ  
て名を祀る。おもめどば。とぞひよ。今夜の團坐ハ福也。幸い。  
ナづコノ素生と禪ふ。耳うす立マツメタ。抑五十六代の聖主清和  
天皇トスノ四代左馬从源朝臣模及多田。在セタク。世の人多田満仲  
と稱す。さうふ満仲をゆふ。ナス肯のるふ。有年筑紫の假  
治セ召す。二つの大刀と造りしもよ。件の假治ハ名譽のりのみ。  
八幡宮へ七日社奉。公れ頗丹精と抽つ。凡六十尺。て最上の大刀  
二口と歎。長サ。ものく二尺七寸。満仲。ナス有罪のりのと切せそ  
れを試みゆふ。一つの大刀ハ罪人の鬚をかたて切ふ。鬚切と云ふ  
名つけ。又一つの大刀ハ膝をかく。切ふ。膝切と云ふ。  
満仲の嫡男。頼光。朝臣の時小至す。美田源次綱。有一タ。一條大官へ使

そとく。彼鬚切と主と借りて帶としき。不慮小弓の大刀をりつて  
鬼の腕と功もとく。うて鬚切と更めく。鬼切とぞ呼り。二の弓  
おも病床小猿丸の大刀をりつて。山蜘蛛と砍りへとあ。うて猿丸  
とも改名して。猿勝切とぞ呼り。さて二の二口の宝刀とべ。満仲も  
六代の孫六條判官為義が家小使とぞ呼り。有二々の大刀。  
風毛一階。鬼切が吠ふる声ハ。獅子の鳴ふ似うどく。又鬼切を改て  
獅子の子とぞ名づけ。蜘蛛切が吠ふる音ハ。蛇の泣す聲とぞ呼り。又  
と改名也。三の元小馬氏判官へ。彼吠丸と號ひ出でて。熊野別當教  
真小与下。かかる宝刀と教真が。身小者と小ゆゑぞ。く。權現へ進  
あうけ。ふ元暦のち。範頼義経。簾金殿の代官として。平家を  
まえ入。西海より討の自。熊野別當湛増。ひく。教真が。義より詔をうけれ。

吠丸の大刀とぞ出で。義経へ贈りしき。義経殊よもじびて。示  
吠丸と更て。薄緑と名づけし。これハ。熊野の春の山の緑をもじて  
出されば。薄緑の名を負せし。かくて。義経へ。舍兄弟朝と不和ふ。す  
大功ありとづども。簾金殿へ入る。空く腰越。う追えられて。京師  
へのむ。公願の旨ありて。彼薄緑の大刀と。箱根権現へ奉納をう  
け。建久四年五月廿八日。曾我五郎時宗。又の仇。工藤祐経を駕ん  
と。もと。箱根山へひひたて。別當行実。又外を。ざら。の暇を告うべ。  
行実も。やその気きを猜して。彼薄緑の大刀を。とく。歩く。時宗  
とく。一。の。大刀とりく。おり。隨小仇人を。とが。駕ら。た。る。  
そのうち。薄緑と。バ。藤金へ。歸れ。太平記の歎の巻。みづく。二の歎の  
巻。とり。り。の。舊の太平記の前巻。みづく。など古書。みづく。一の説

小志<sup>おも</sup>と之<sup>の</sup>へ箱根<sup>はこね</sup>の別當<sup>べつとう</sup>行實<sup>ぎじゆ</sup>千<sup>せん</sup>よ。曾我立郎<sup>そがだりやう</sup>が獲<sup>か</sup>る大刀<sup>おほの</sup>を  
満仲<sup>まんぢゆ</sup>のとひ<sup>とひ</sup>とめて膝丸<sup>ひざまる</sup>と名づけぬ。とれ光<sup>あらみ</sup>と改<sup>か</sup>められて脚踏切<sup>くわきり</sup>と改<sup>か</sup>名  
し。為義<sup>ためよし</sup>のとひ<sup>とひ</sup>亦<sup>よ</sup>吠丸<sup>ひなまる</sup>と改<sup>か</sup>められて<sup>よ</sup>經<sup>きよ</sup>亦<sup>よ</sup>落<sup>おち</sup>と名づけ<sup>よ</sup>る。のふ<sup>ふ</sup>。  
友切丸<sup>ともきつまる</sup>かのめ<sup>かのめ</sup>。友切丸<sup>ともきつまる</sup>かのめ<sup>かのめ</sup>大刀<sup>おほの</sup>を友切丸<sup>ともきつまる</sup>かのめ<sup>かのめ</sup>毎春<sup>まいしゆん</sup>を索<sup>さく</sup>から  
生<sup>う</sup>ねて。されば為<sup>あ</sup>子<sup>こ</sup>を毒<sup>どく</sup>妻<sup>め</sup>と賣<sup>う</sup>。苦公<sup>くわこう</sup>看管<sup>かんかん</sup>の腸<sup>は</sup>を断<sup>き</sup>る。こそ  
彼友切<sup>ともきつ</sup>とひ<sup>とひ</sup>大刀<sup>おほの</sup>ハ<sup>ハ</sup>づるる物<sup>もの</sup>をとひ<sup>とひ</sup>ふ。前<sup>まへ</sup>小演<sup>こゑん</sup>する獅子<sup>しそ</sup>の子<sup>のこ</sup>の別尾<sup>べつび</sup>。  
為<sup>あ</sup>兵判官<sup>ひょうはんがん</sup>贊<sup>さん</sup>り<sup>り</sup>け。熊野<sup>くまの</sup>別當<sup>べつとう</sup>教真<sup>きよ</sup>。吠丸<sup>ひなまる</sup>と<sup>と</sup>せん<sup>せん</sup>へ。一具<sup>いつぐ</sup>お<sup>う</sup>  
る大刀<sup>おほの</sup>一失<sup>うしな</sup>。元<sup>もと</sup>ひりのた<sup>た</sup>やうよ受<sup>うけ</sup>と<sup>と</sup>ば。播磨<sup>はりま</sup>國<sup>くに</sup>。うに假治<sup>げじ</sup>と  
召<sup>め</sup>上<sup>あ</sup>り。獅子<sup>しそ</sup>の子<sup>のこ</sup>を奉<sup>まつ</sup>ふ。と<sup>と</sup>すも違<sup>たが</sup>ひ<sup>ひ</sup>造<sup>つ</sup>せらる。最<sup>さい</sup>上の大刀<sup>おほの</sup>  
け<sup>け</sup>ま<sup>ま</sup>べ。悦<sup>え</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>と限<sup>か</sup>り。目貫<sup>めぬき</sup>小鳥<sup>ちのとり</sup>を解<sup>と</sup>く<sup>と</sup>れば。小鳥<sup>ちのとり</sup>とぞ名づける。  
の小鳥<sup>ちのとり</sup>ハ獅子<sup>しそ</sup>の子<sup>のこ</sup>より。二分<sup>ふたぶん</sup>長<sup>なが</sup>う<sup>う</sup>り<sup>り</sup>る。有<sup>ある</sup>一日<sup>いちにち</sup>二<sup>に</sup>の大刀<sup>おほの</sup>  
抜<sup>ぬき</sup>て。障<sup>さう</sup>子<sup>し</sup>へ<sup>へ</sup>よせうけて置<sup>おき</sup>く。人<sup>ひと</sup>も<sup>も</sup>うらかぬ。が<sup>が</sup>とくと倒<sup>たお</sup>す音<sup>おと</sup>  
吹<sup>ふき</sup>え<sup>え</sup>け<sup>け</sup>。びり<sup>びり</sup>ふ大刀<sup>おほの</sup>を<sup>を</sup>持<sup>も</sup>びぬ。損<sup>そん</sup>じやまくらんとく。ひ<sup>ひ</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>て<sup>て</sup>ま<sup>ま</sup>り  
ば。目<sup>め</sup>貫<sup>ぬき</sup>ハ二<sup>ふた</sup>丈<sup>じやう</sup>と<sup>と</sup>じひつ。小鳥<sup>ちのとり</sup>が。かくすすみ<sup>み</sup>すく<sup>く</sup>ふけ<sup>く</sup>と<sup>と</sup>へ不思<sup>ふしき</sup>  
議<sup>ぎ</sup>。かくす<sup>す</sup>べ<sup>く</sup>や<sup>く</sup>ある。截<sup>き</sup>る。わ<sup>よ</sup>るかと<sup>て</sup>先<sup>さき</sup>を<sup>を</sup>き<sup>く</sup>も<sup>も</sup>。は<sup>は</sup>  
怪<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>。柄<sup>つか</sup>と<sup>と</sup>る。目貫<sup>ぬき</sup>と突<sup>つく</sup>抜<sup>ぬき</sup>て。手<sup>て</sup>を<sup>を</sup>だ<sup>だ</sup>り<sup>り</sup>た<sup>た</sup>くと<sup>と</sup>え<sup>え</sup>。これハ一定<sup>じゆう</sup>獅子<sup>しそ</sup>の子<sup>のこ</sup>  
が切<sup>き</sup>る。と<sup>と</sup>る。脚踏切<sup>くわきり</sup>と改<sup>か</sup>め。脚踏切<sup>くわきり</sup>と改<sup>か</sup>め。脚踏切<sup>くわきり</sup>と改<sup>か</sup>め。  
後<sup>のち</sup>又<sup>また</sup>為<sup>ため</sup>義<sup>よし</sup>の大刀<sup>おほの</sup>と<sup>と</sup>獅子<sup>しそ</sup>を<sup>を</sup>改<sup>か</sup>め。纏<sup>まとい</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>。と<sup>と</sup>亦<sup>よ</sup>是<sup>これ</sup>の巻<sup>まき</sup>  
つ。かくす<sup>す</sup>ば友切丸<sup>ともきつまる</sup>の初<sup>はじ</sup>の名<sup>な</sup>ハ<sup>ハ</sup>鬚<sup>ひげ</sup>切<sup>き</sup>と<sup>と</sup>ひつ。と<sup>と</sup>れ光<sup>あらみ</sup>のとひ<sup>とひ</sup>鬼切<sup>ききり</sup>と改<sup>か</sup>め。  
奉<sup>まつ</sup>入<sup>いり</sup>獅子<sup>しそ</sup>の子<sup>のこ</sup>と改<sup>か</sup>め。更<sup>また</sup>又<sup>また</sup>友切<sup>ともきつ</sup>と名<sup>な</sup>づ<sup>く</sup>る。保<sup>まつ</sup>え平<sup>ひら</sup>給<sup>くわら</sup>物<sup>もの</sup>  
東<sup>とう</sup>艦<sup>かん</sup>示<sup>し</sup>と接<sup>つ</sup>ざる。友切丸<sup>ともきつまる</sup>のと<sup>と</sup>え<sup>え</sup>。東<sup>とう</sup>艦<sup>かん</sup>文治<sup>ぶんじ</sup>元年九月十九日<sup>の</sup>

寶庫藏 老一

條よ法皇御護の御劍。去年紛失を。考る比江判官公朝。これを求  
ひそ献上せし。聞聞の間。今日二品輞廟書とりて公朝ふ仰  
らる。是以左典厩船の大刀と奉獻せし所。吠丸鷦鷯（シマフサ）ニ至る。  
同書文治元年九月二十日の條。參川守範頼朝臣系。去月二十日。  
西海より入洛。法西不於。仙洞の重宝御劍鷦鷯在と云取。今度進  
上。范ぬ。此至一平。この黨頼寿永二年城外の刺。清経朝臣御劍二  
腰と取。吠丸鷦鷯を乞ひ。今この文又由と見。為民吠丸と熟  
野別當教真ふ乞ひ。そのうち湛増の手。糸絆と乞ひ。彦緑と  
改名す。遂に箱根權観へ進じ。而りと。箱根別當行實あり。と  
魯我立郎よリヒトロトリ。劍の巻の錠も又信ドガ。被吠丸。ハ  
天朝のとん。後白河院の御護刀ぶ進じ。而りと。寿永二年の  
滅亡せり。文治元年九月の比再び院の御劍とへり。と  
リ。東溫を證文ととべ。とのこうと批評。爲義とや女督  
り。とつとも。在り。と。生家人。と。熊野別當教真へ源家の重  
宝。吠丸の大刀と。バ。と。ベ。と。い。こと。教真へ。と。後悔し。更に一口  
の新刀を造。し。る。が。舊刀の爲。小。二分。む。と。切。縮。と。き。と。て。禪子  
の子を。改。め。と。友。切。と。名。つ。る。と。り。と。統。ハ。怪。達。よ。る。と。つ。と。信。ト  
か。一。又。東溫。小。裁。と。る。所。の。鷦鷯。の。御。劍。ハ。保。え。物。語。み。も。見え。て。  
ミ。養。判。官。子。ど。も。駿。俱。ノ。で。新。院。の。御。身。方。小。や。あ。し。う。べ。親。院。御。感。  
の。あ。ま。り。近。江。岡。仔。底。の。莊。美。濃。國。青。柳。の。莊。と。と。も。小。賜。物。と。う。タ。リ。  
鷦鷯。の。御。劍。と。う。と。の。鷦鷯。ハ。自。河。院。神。泉。死。と。御。幸。さ。り。と。

十四ノ系

教真

別當長

快

子

湛

増

大

比

清

経

朝

臣

と

う

鷦

鷯

鶴とつゝせそ。山塊トタク。殊ふ逸物とゆえよる鶴か。不圖水中より  
被をあげよる。金覆輪の大刀たり。白河院殊ふ小形極美。サレシテ。  
鳥羽院へ傳く。させゆひ。も羽院又崇徳院へすわづしゆひ。けで。  
為義判官へ賜てり。かれど爲義入道降人。とすりて。嫡子の義経を  
憑うて。身とすせよと死。彼鶴丸とも。承朝へゆづりよれり。由瑞  
ある大刀のれば。後白河院の御護刀。小刀とす。又東瀛より初  
より吹た時鳩と記し。次の條より。吹た鶴丸と記せし。不審に。承朝の  
と鶴丸を時鳩と改名せよ。又時鳩ハ源氏の重宝。鬚毛の一名。欽  
翁ぬじがくのびく。実禄ふく。その本と推と。曾我五郎。小伴れ三義。  
祐経と。敷ひよる。某ハ源家の重宝。友切丸。小刀。又祐経の手。緑と  
改名あらずといふ。吹丸。小刀。又時宗。仇人祐経と。敷ん科。小年。未  
試。小刀。又別し。手緑の小刀あれど。時宗。古今。手。刃。の勇士。小刀。の夜  
比類。力。死。衝。にて。け。大刀。も。名。の。手。紀。よ。あ。う。ざ。れ。ば。越。す。と。そ。す。當。時。の  
小兒。他。首。或。ハ。浮。緑。と。あ。す。或。ハ。友。切。丸。と。あ。す。白。い。よ。は。某。が。功。名。も。  
空。く。吹。た。友。切。小。奪。れ。よ。されば。大刀。の。手。と。記。せ。一。書。名。小。劍。の。卷。の。ど  
鳴。う。び。中葉。ト。ス。ノ。大。刀。と。劍。と。混。難。一。ヒ。豆。小。刀。え。よ。る。へ。悞。り。う。  
和。名。沙。ヌ。劍。ハ。和。名。と。施。さ。ぞ。別。又。屋。妻。妻。を。舉。て。文。選。の。流。豆。流。岐。と。往  
せ。今。按。ど。ふ。属。鏗。ハ。吳。王。夫。差。が。伍。子。晋。へ。賜。よ。る。劍。の。名。又。れ。べ。劍。と  
豆。流。岐。と。和。名。せ。ん。も。の。か。う。ぞ。さて。和。剣。づ。く。と。ハ。づ。れ。て。る。の。ま。よ。く。  
両。刃。と。で。ハ。劍。と。も。豆。流。岐。と。も。の。び。そ。又。和。名。劍。も。一。刀。と。こ。と。之。大。刀。  
和。名。太。口。小。刀。加。太。那。と。往。く。れ。ば。だ。ち。も。か。く。あ。も。ミ。ク。一。刃。の。り。の。ふ。限。れ。  
和。名。太。知。と。く。く。ら。う。る。の。ま。よ。く。か。く。み。と。ん。元。ひ。あ。づ。の。略。小。刀。加。太。那。

と和名沙小注さわづーたとバ。今服指と喝りのへかうすくやうかみと  
喝りのへとらし。今のかこみ。片手をと羅らきりのふあいば。こまと  
みの。和名の持もりあるのあれど。えくあそ。その怪おぞとあざやみりん。  
職原むらはら人ふしきぬ。又今の人。小くまと喝りのめ。和名。賀太奈カタナ。  
和名鉢ハス。刻鑄くくの具の部ぶ。小刀子。錐鷲ささわし。鉸ト。生せん。この字と被て  
喝のりへいと後のとぞし。そべて劍の卷まき小記こきをとこう。合点あてたがつ。死  
累の。鬼きの鬼神きじんと熟じゆと造化の迹あと。又冤鬼まんきとつゝとれへ出靈ゆきれいの  
類たぐい。づとも形かたちの。あくま小綱こまつなへひくと形かたちの。鬼きの手  
と切きアマテラソ。うねぐに。又獅子しへ天竺てんしゆの猛獸めいじゆ。唐山とうさんみも  
る紀きのう。小鳥ちよへづる。獅子しの鳴なま声こゑをうまうと。大刀おほのこの名  
あせらあせらせん。野猪やぢとゐのあせら。ス略さく。とあくともそべ。真まことの獅子  
小人こじん。大刀おほのこと。おとくへ同貫ひとぬきとあれ。ハ鬼切ききり  
の目貫めぬき。小獅子こしと造つくりとあく。そ獅子しの子と改名かめい。あくまや  
あらんまうん。又蛇への注声じゆせい小人こじんと。りふも。おだつうと。山鬼さんきなどの。  
大蛇おおへの軒睡けんすいと。吹ふきと。あくまんどり。蛇への注声じゆせいと。吹ふきと。りふと。  
絶ぜつく吹ふきと。かく吹ふきた。蛇への注声じゆせいと。鳴なまへひくと。く吹ふきと。あく  
まひりん。この判官はんくわんへ耳みみよ能のある。み葛くず蘆ろふかかくくべ。公治長こうじなふの劣ひど  
ど。物ものふきよせ。うりうりと。ばくすか。ふも信しんトトがく。おきよ。吠ほたと  
名なづけ。二別にべつよ必ひ以い。二至にしの虚う實じを辨べじて。そ。ふ。恨うらを。人ひと  
へけれど。の。母め世よの。人の。あく。うり。ハ。曾我そが兄弟きだいの恨うら。安元二年十月  
被胞ひぼ兄弟きだいが入い。受け。河津三郎祐泰こうたい。伊豆いづの奥おく。持場もちばの。圖ず。也や  
矢やふ。矢や。忽すこ。余あまを。墮おち。時とき。小一萬いっまん。僅すこ五歲ごさい。

伊東祐親

女児

子

遍

頼朝の  
妻

娘

子



弟を立嗣  
第箱王僅々三歳。時寵と名す。  
才のせ氣といふとれたる。又祐泰と號する。ユ廉祐経が所為す。は  
て急て忽地復讐の志あり。もとより小治承三年の秋八月。前右  
兵衛佐頼高倉の宮の令旨をり。又よみ。伊豆の  
山木にて石櫓山小旗を揚。その軍利をもじく。一旦没落志す。ども。  
廣常常胤ひろつねが手て助たすけふ。よつて。づ。經ひきもなし。圓左えんざハ浪なみとうら徒むらへ  
基もとと兼あわ食くよ。聞ききよべ。まのひやで。平家の恩顧おんくいと諱えいうだら。坂東さかとう  
武者ぶしやホ。多くへ旗はたをとく。縁えんを求め。兼あわ食くく。生社おうしゃをとく。ども。祐成時  
宗むねゆきが祖そ父ち。伊東祐親入道いとうすくにゆき。義よしふ伏ふぶくて。勢ぜいひよ屬ある。小松少將こまつ惟盛ゆせい  
の陣所じんしょへ來くわり。加くわんとく。伊豆の鯉名の浦こじま。海上と廻まわらんと。霞河かくが  
の出で。天野藤内遠景あやのとう。生拘まつりと見て。黄き、懶河この脚あし。後亭ごていへ  
十四卷じゅうよんの  
系圖けいとよ  
河津かわづ郎ろう  
祐近すくによ  
作つく祐近すくに  
祐道すくみち津つ  
連つれ節せつと  
祐成時ゆせい景けい  
大おほ義よし津つよ  
難ひんと腕うでとのりのとく。祐親の二男。伊東大郎祐清密ひきよ。密ひそかにこれと告おす。みよ。て。その  
義よし津つよ視みる。もとより小先年こせんねん。祐親入道すくにゆき。朝卿あさひともとくをとんと  
難ひんと腕うでとのりのとく。祐清と見みて推辭すいして愛あせ。又または印款いんくわんにて囚徒きゆととなつて。行ゆひ  
小の子ことて。つてう因賞いんじょうと蒙まつへ。もと死しの暇ひまとあり。とまつ  
きて。平家ひらへ託ときかん爲ため。かく上洛じようらく。恩おんのあよ死しとて報むく。終お  
付つけ。スしき。今いまよあひ。美謹びごんとせり。そのうち兼あわ食く殿だい。祐親法師すくに  
罪つみと宥ゆる。対面たいめん見みかされ。祐親盡すくに。もと死しとぞ。忽地ふと目め殺ころ  
坐す。比ひ祐親すくにが女兒めのことり。密ひそかに通つて。男兒おとこと產うぶ。又または終おの祐親深ふか  
次つぎの卷まき  
次つぎの卷まき

一本手

祐清を  
祐親が婿

子を大

系団を

三男を

翁を

母を

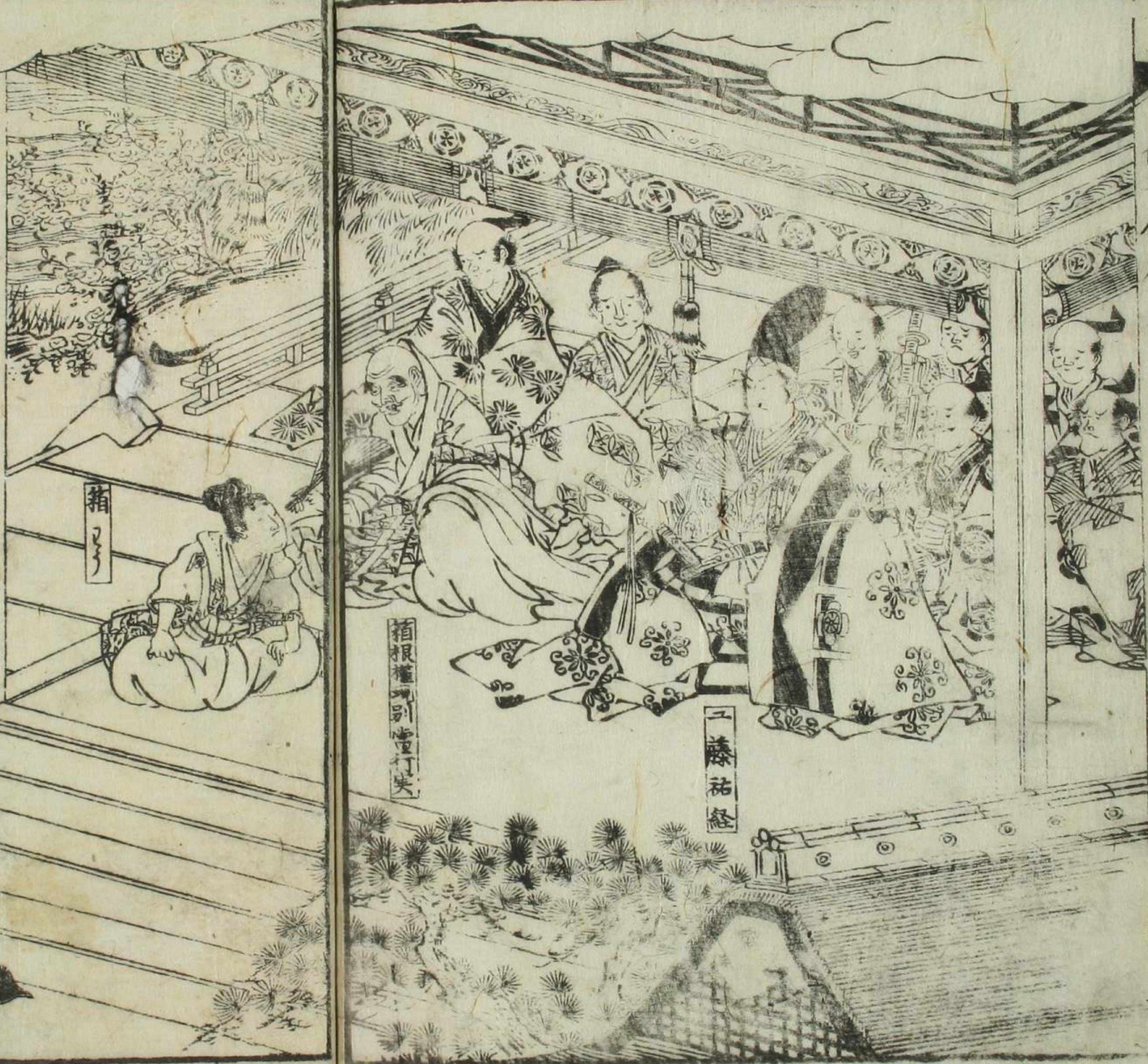
と仰せ。かくてぞ祐成時宗ハ祖又も伯父也。平家の子孫なり。小  
うちて世の中も険くありて曾我太郎祐信不養生。浮浪人ふりあり  
き。五郎ハ幼稚と。勇氣殊と。小達一けび。母公ハ終より禍を  
惹生え。と附毛を。祝髮して亡父の菩提を吊へ。教馴し。箱根越境乃  
別當行實の弟子として。おで登山にてたまじゆ持宗のゆき復讐の心  
移り。遂に箱根と下山せり。母公又責懲され。彼此に於井  
あくちど。北条時政ハ五郎が勇敢。雛と。意中又謀る。うれば。  
手をつけて代り。款待し。もぐから鳥帽子親と稱。これ  
元服す。時政の一字と。曾我立郎時宗と名告ら。時宗  
の宗の字よ。さまでの説ゆ。時政より六世の執權相模守時宗朝臣  
の乳名と北條五郎と稱せ。曾我立郎時宗のひなハ致といふ字と書べ  
て。と時宗と書。七條五郎とどうちど。ことよりへもあれど。東温み  
曾我立郎時宗とあれば。誤とひがに。譬言。西行法師の俗名。佐多兵  
衛義清。とりひうべ。さて則清とも。憲清とも。書するが如く。のこうの  
記録。ふへ人の名告。訓のえふ字。とりべらゆりつけで書例あり。バ。  
曾我五郎の名告。或へ時宗と書。ゆもへ時致と書する。うだべ。り  
推量の説を加ると。北条時宗執權のせふ。諱て致の字不代するや。  
とかほしさ。北条時政が。のぞくる我入帝と。うそと。争て。竊え。仇殺の  
後。こへく。真実。その孝心と感服せ。かあ。底意ふ。その  
胞兄弟と。欺く。縣と。縫食殿を。そり。あらん爲。そのれいふ。うそと。を。  
このと。江原家既。又亡びて。西海の賞罰。を縫食の決罰。ふ。ある。れねり  
せと。早く。あす。お家へ。うそ幼稚し。もう。う。海内の権柄。ほのづく。

時政二家小歎して、うづらへ下りてゐる。と深く謀へて彼見才を小ぎりへ  
ひ火と燒つた。密か遣客となりて渾金殿へ其許の祖又祐就入道の仇  
あり。祐就との争鬭と死ハ人のよみが小孝なりと申す。祖又の灵と慰びて、  
翁ゆき密語せざるまゝ祐成時宗の危弱官へ。且祖又祐就が自殺せし  
縁の説をもじど。その勇みまゝあれど。その齋の足でざるゑふ。北条  
小數作ら是也。又一層の恨と生す。遂に時政が爲小刺客となりとを曉す  
が仇人祐就と駆けめぐる夜、兼金殿を犯す。あらんとする。而も小馬  
門の胞兄弟が勇と好むとの志より。未だノハ理不ふ。もとより。舊  
怨をもつてゐへど。遂に祐就と赦免一命とつども。祐就も又猶とある老入道  
されば忽ち小自害もするべしや。あれば祐就が枉死の自業自得のみへ。  
秋成時宗とて、そんへがう角初弱みて、の頭未とあらば。老奸の舌頭アリ

詫惑されて、あゝ至り。亦惜しへ。あくる小渾金殿ハ高運の大將軍を  
ぞんじしが。祐成時宗勢ひ究アセ。兄ヘ仁田四郎忠常小駕と弟ヘ小吉人童  
五郎を小抑留ら。北條が奸計ひづくふるじ。時政との機密の漏んとと  
おそれて。亦密小祐就が子。犬房丸小りひ火を焼つた。頼朝卿へりふゆして。  
助をやとおだて。時宗と犬房丸よきしをせし。後又五郎へも有只らは  
る。何よりてことあると。バユ羅祐就ハ殊の渾金殿のひいえめをも。  
勢あり。清神く。箱根山ゆき。箱王が氣きとて赤木徳の經りとせず。し  
て。ひき復讐の志あらえまとば。既よき復讐の志あるをもる。うれし。  
常住坐臥す。ニモと禦ぐの用心をせへぬ。と云。彼胞兄弟は。浪人として。  
痴く。将食く。宿び入り。らよまふ。平生と遙かに。裡より。此の翼はれべ。時政へ  
かの。秋成時宗と取詐て。刺害をまつとも。その手筋を。義時の死を喜んで。

江藤祐経

箱根權別當行矣



曹武侯を驕りて。禪師公嘗てその辺で。実幼公を撃せし。ふと  
北条又子の奸計。やがて小畠勢にて。我ね々の統と。後九代の執權（おんじゆう）があたぬ。  
公暁（こうぎ）も又又我家の母（うぶ）をもひきかへ。幼小にて。との頃未と。洋小笠を。ア  
と後（ご）と。とくに。右大臣（さだひん）と。もん又の仇（ごめい）をもうらこと。を撃つて。豫急の武将  
時（とき）が人となりて。右大臣（さだひん）と。もん又の仇（ごめい）をもうらこと。を撃つて。豫急の武將  
たる。禪師の外。もはやどりかせ。と。公暁（こうぎ）ハ實言と。云ひはす。又の仇（ごめい）もあ  
れ。叔又の大臣と。害せしの。からだ。その年も。急地北条（ききちほりょう）が。馬（うま）を殺（ころ）す。北条  
又子が奸智（けんち）と。長（なが）よ。曹操直義（さうばうじき）の上（うえ）ふ出（で）し。當時人を。欺（あざ）くとも。ひう天を  
欺（あざ）く。後世小論定（こうせいしゅりんじやく）にて。入又の悪（あく）と。不<sup>可</sup>なりの。表（あらわ）す。各（おのこ）位へ。何<sup>可</sup>能（むかし）ひゆ。  
そく家相傳（じけんしやく）といふ冊子も。往昔の小説（しやくせき）と。がたこと。まもん記（き）で。もゆくび。  
鬼王（きおう）の童の名。又。曹武侯家（さうぶれいじや）の童名を。箱王と。囁（ささ）く。又。箱根の行童（こうとう）。  
壽王（じゅおう） 東陽文治五年二月十二日（とうようぶんじごねんにがつじゅうにじ）の。樂童（らくぢやう） や。又。後寛僧都の童庵桂（とうあんけい）。有王龜王。又。爲義の季

子。又天王。あり。源義經の乳名。遼那王。木毛峯。小進。あらべ。宜。う。そ。を。を。

鬼王。又童の名。り。と。あらべ。東陽建久四年五月廿八日の條（じょう）。  
曹武侯五郎。と。大見小平次。よ。頑（がん）。と。の。あれど。近江小平太。とり。の。ハ  
え。と。新左門。圓。と。の。後人の謡。祖（そ）。就中。時宗。朝夷。が。草搾（くさしづ）。と。之。と。ハ  
え。と。と。ら。ひ。て。馬。よ。抱。り。と。奪。う。と。東。監。そ。の。餘。の。軍。記。又。記。也。と。撮。合。そ。と。そ  
が。と。と。ら。ひ。て。馬。よ。抱。り。と。奪。う。と。東。監。そ。の。餘。の。軍。記。又。記。也。と。撮。合。そ。と。そ  
義氏。と。曹武侯立郎。小進。と。う。え。と。彼。朝夷。へ。和田。義盛。が。三男。ふ。そ。不曾  
義仲。が。妻。鞠繪。が。産。と。死。なり。元。曹。元。年。春。正。月。木。曹。義仲。へ。近江  
の。栗。肆。と。討。死。と。比。鞠繪。へ。和田。義盛。と。生。拘。る。義盛。鞠繪。う

勇力小變て。済食糧へきして。二年を要て朝夷を產す。されば建久四年。曾我五郎が。又の讐言祐經と殺もる。それへ朝夷僅々九歳ゐ。或と七歳ゐ。ともソク。あくべ義秀。勇力の人と云ふとも。あの三時家と力競せ。蟻嶋の車小向が如けん。彼義秀と朝夷と唱う。安房小朝夷郎。あくべ。アラ小所領ゆ。やとうねべ。人そらかくてありのと。友切丸。すらぞ。友切丸と。りづきも。積つ小足。とせん放さ。るべど。と。小膝と。敵。席と。抱く。之たすけ。と。寝皆呼と。ぞ。感。ど。る。

萬  
初  
序  
用  
藏  
也